書　評

持続可能な発展に向けた地域からのトランジション

白井信雄・栗島英明（編著）

出版社：環境新聞社　発行年：2023 年 8 月 31 日
価格：2,750 円（税込）　ISBN：978-4-86018-433-9

本書は，持続可能な発展に向けたトランジション（＝転換）を題材として，白井氏を筆頭に関連分野の第一人者ら 18 名がそれぞれの分野での調査研究や実践レポートをまとめた 250 頁に及ぶ著作である。サブタイトルは「私たちは変わるのか・変えられるのか」となっており，持続可能な発展に向けた「表層的な変化」や「対処療法」ではなく，規範，枠組み，目標，様式，制度や組織，構造，社会の潮流といった「根本」の変革をめざす点に本書の特徴の一つが表れている。

例えば，序章では「本書では，変化や改善，修正ではなく，転換にこだわる」と宣言されており，日ごろ各自治体の審議会等における施策の検討時に，「理想は〇〇だけど，今回の案は以前より改善されているから賛同する」と発言しがちな評者は，ドキッとさせられた。

本書の構成は，序章を除くと「第 1 章　なぜ，地域からの転換が必要なのか？」「第 2 章　意識や行動を転換した人々に何を学ぶか？」「第 3 章　地域の現場でどのように人と地域の転換が進んでいるか？」「第 4 章　転換のためにどのような方法が試されているか？」及び「第 5 章　転換後にどのような地域社会を目指すのか？」の 5 章構成となっている。各章の扉には，章の要点が簡潔にまとめられており，読むべき書籍が多く時間が不足しがちな読者にとっての一助となっている。

特筆すべきは，編著者の白井氏の専門である環境論・環境政策論といった分野を超えて，心理学，社会学，経済学など幅広な領域にまたがる議論を展開している点である。例えば，組織・人材開発の転換のために活用される「U 理論」や個人の転換に関するライフヒストリー分析は興味深く，1,000 人規模のアンケート調査では，意識の転換を促す要因や行動転換後の満足度などが定量的に明らかにされている。さらに，山梨県の小菅村，神奈川県の藤野地区（相模原市の一部），岐阜県の石徹白地区など，転換に成功しつつある地域のキーパーソンが執筆する詳細な事例紹介も魅力的である。

本書の終盤部分に，『成長の限界』から 50 年が経過したことなどに言及されているものの，欲をいえば，「根本的な転換に必要な年数はどれくらいなのか」「その中途では，どのような出来事が起こりうるのか」といった時間軸に関する議論が深められても良いと感じた。

こうした点は，評者が指摘するまでもなく，おそらく今後の編著者らの研究課題になっていると考えられる。編著者らの今後の研究成果に期待しつつ，上記のようなポイントから，学会員の皆さまに，本書の一読をお薦めする次第である。

兵庫県立大学環境人間学部　増原直樹